

はじめに

園長 片岡 康子

本園は、今年、創立123年目を迎えることになり、伝統を受け継ぎながら主体的に、創造的に、日々の活動を展開してきており、このたび、『保育の研究』第4巻が刊行されることになった。

数年来、国立大学附属校園の存在意義が問われ続ける厳しい状況の中、本園では、園内研究会として定期的に保育カンファレンスが行なわれ、その研究成果を『保育の研究』刊行によって発信してきた。このように継続して附属幼稚園の研究成果を発信し続けることは意義のあることである。

これまでに、第1巻ではカンファレンス全体の経緯に関する研究、第2巻ではひとりの保育者の変容に関する研究、第3巻では保育者の連携に関する研究が報告され、そして今年度は、強力な連携の中で、ひとりの子どもの保育事例を視点にした検討が幅広い側面からなされた。いずれも、保育者が、子ども一人一人の活動の場面に応じて、様々な役割を果たし、その活動を豊かにする役割を果たすことに生かされることを目指したものである。

日常の保育と関わりながら、実践しつつ研究が行なわれ、その研究成果は日常の保育実践に還元されるというサイクルが定着してきていることは、個別の研究成果を超える大きな成果といえよう。

今、国立大学は独立行政法人化という先の見えないシステム変換に向かって進み始めた。存在意義を主張するためにも、保育の普遍性と本園の独自性を明確にしつつ、今後とも保育カンファレンスが続けられ、本園が、実践に生きる研究成果を発信する拠点になることを願っている。

目 次

はじめに	3
I. 研究の内容	5
1. 本年度の研究について	5
2. 保育カンファレンスの検討（IV） —U夫の保育事例から—	7
はじめに	7
1998年度カンファレンスの概要	8
検討の方法	9
経過〈1〉1998年5月20日のカンファレンス	9
経過〈2〉その後の保育実践・カンファレンスなど	15
考察	20
おわりに	22
3. U夫の保育記録	
〔1〕1998年12月8日の保育記録	23
〔2〕1998年12月18日の保育記録	28
4. カンファレンスの実践例	32
〔1〕1998年5月20日のカンファレンスの概要	32
〔2〕1998年12月21日のカンファレンスの概要	48
〔3〕1999年1月11日のカンファレンスの概要	66
〈補足資料〉	82
II. カンファレンスと保育実践 —個々の保育者の立場から—	84
あとがき	94

I. 研究の内容

1. 本年度の研究について

柘田正子

私たちが園内研究会として継続してきた保育カンファレンスは、今年で丸5年を経過し、すっかりわが園の保育に定着した感がある。そしてこれまで、カンファレンス自体の展開の経緯（第1報）、カンファレンスを通して変容する保育者の姿（第2報）、チームとして動く保育者の連携の様子（第3報）をそれぞれ視点として、私たちの保育カンファレンスについて検討を重ねてきた。本研究は、それに続く第4報である。

さて、先に「園の保育にカンファレンスが定着した…」と表現したが、これは、私たちが行っているカンファレンスに関して、以下に挙げるような具体的な状況が認められるようになったことによるものであって、本年度の研究には、このような背景が存在していると言えよう。すなわち

- ・直接的な問題解決を目指すのではなく、話題提供者の問題意識に沿うことをその特徴とするこのカンファレンスの進め方や、一人ひとりの参加者の自発性と自由さが尊重される雰囲気等をメンバーが体験的に十分理解し、カンファレンスに対する気負いが少なくなってきたこと。
- ・それにより、カンファレンスの場におい

て、個人差はあるものの、メンバーが以前よりも自身の内面を開いて率直に自分の保育を語れるようになってきていること。

- ・保育に関して感じたことや考えていることを自分の言葉で表現することによって、保育に対する自らの姿勢や子どもの捉えを、他者と共有できるものとして確認したり、あるいは独自のものとして認識したりすることができて、さらにそれが、自分らしく主体的に保育に臨むことにもつながるのだということ、メンバーが体験的に気づいてきていること。
- ・保育者同志の連携がスムーズになってきていることから、ひとりの子どもに複数の保育者が様々の立場でかかわっており、メンバー間で多くの情報や意見の交換ができるようになってきていること。

などである。そしてこれらの状況が、さらに日々の保育の実践とカンファレンスとの結びつきを強いものとし、保育者を軸として、実践とカンファレンスが互いに呼応し合うような関係性ができてきているのである。

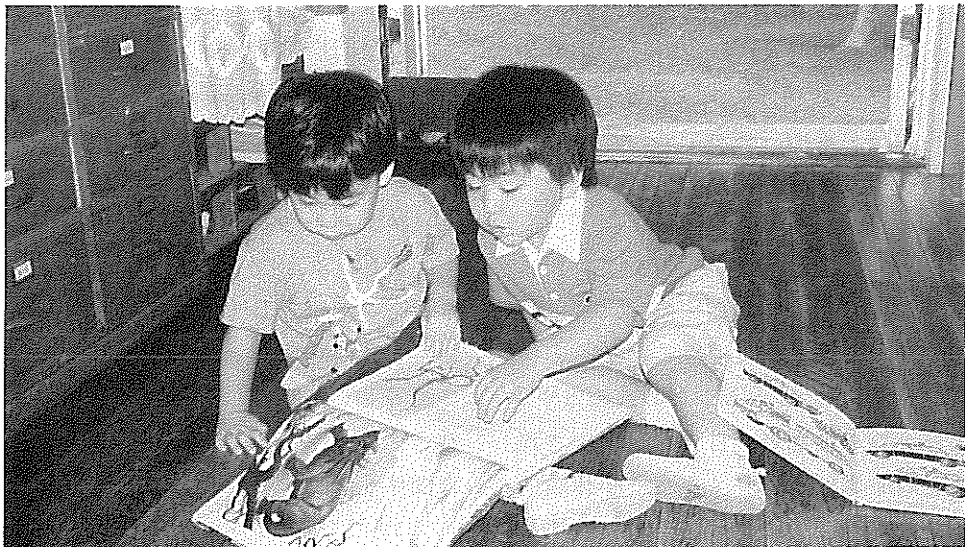
こうした中で、ひとりの子ども（U夫）の保育事例を研究の視点とした本年度の研究が

生まれた。毎日の保育の中で、U夫と精一杯向き合い、時には戸惑い、時には新たな感覚で受け止め…といったU夫の担任保育者のさまざまな思いが、保育実践と並行して継続する保育カンファレンスにどのように現れ、また変化するのか、そこで保育カンファレンスはどのような意味を持つと言えるのか、等がカンファレンス検討の課題となっている。

さらに本年度の研究についてここで強調したいことは、研究の視点がU夫の保育事例であり主たる報告者がU夫の担任保育者ではあるが、同じカンファレンスのメンバーである他の保育者たちの立場は、U夫に関する情報提供や、話題提供者に対する「聴き手」のみとどまっているものではないということである。このカンファレンスのメンバーに特徴的なことは、全てがそれぞれ等しく主体的に

参加しているということである。カンファレンスの話題も毎回U夫の事例に限られているわけではなく、話題提供者もいつも同じということでもない。それぞれの保育者が、時に応じて、自らの実践を基盤として問題を提起したり思いや考えを述べてもいるのである。本研究では、このようなカンファレンスの展開が、結果的に、個々の事例やひとつの問題意識をより幅広い側面で検討することにつながっていくことを、推測できるのである。

ひとつの事例の検討が話題提供者ひとりの問題意識にとどまらず、各保育者の実践を通して園全体の保育の姿勢となり、そこからより充実した保育実践が生まれるのならば、園内研究会としてのカンファレンスの手応えは、確かなものである。



あとがき

田 中 三保子

子どもたちが「むかついて」、「きれて」、短絡的な行動にはしる事件があとを絶たず、耳にするたびに心が痛む。そうなる前に、どこかで誰かに自分の思いを聞いてもらうことはできなかったのだろうか。まわりの誰かが、吐き出せずにため込まれている思いに気づいて声をかけてあげることではできなかったのだろうか。もしそれができていれば…とってしまう。そんなに単純なことでは解決しないよ、当人自身がまわりとそういう関係を持つとうしないのだからと言われそうである。でも…と私は思う。私が、幼稚園で子どもたちが生き生きと遊びに打ちこむようすを毎日目の当たりにし、大げさに言えば、そこから生きるエネルギーをもらっているからかもしれないけれど…。

初めて幼稚園に入ったときから、どの子どものびのびと自由感を持って過ごせるというわけではない。とまどい、あれこれ試し、確かめ、つまずき、納得し、その子なりの試行錯誤の過程を経て、自分らしくふるまえるようになっていく。そして自分の持っている力を存分に発揮できるようになる。それぞれが自分のやりかたで試行錯誤を繰り返していく過程は、そういう意味でとても大切である。そして、それはまわりに仲間がいて、保育者がいるからこそできる。子どもたちが素朴な、素直な反応を返し、保育者がきちんと受け止め理解しようとする、そういう環境が一人ひとりを育て自己発揮を促していくのだと思う。

幼児のばあい、気持がすぐ行動に結びつくことが多いので、理解しやすいと思われている。たしかに分かりやすいことも多いけれど、そうでないこともある。内面に突き動かされて行動していると思われるようなとき、たぶん本人にもよく分かっていなくて、まわりにもその意図や気持が読みとれないことがある。それでもなんとか理解しようと、今の気持だけでも受け止めてあげたいと真摯に向き合ってくれる保育者がいることで、子どもは支えられ、そこから抜け出していかれる。けれども、保育者はいつでもそうやって子どもを受け止められるわけではない。保育者の側にも、なんとか子どもたちを理解しようと悩み、試行錯誤を繰り返していく過程がある。

今回の研究報告は、一人の子どもを例にとり、私たちが彼をどう受け止めどう理解し支えていこうとしたか、その過程を明らかにしようとしたものである。保育者それぞれが、個々の立場から彼に関わり、さらに、カンファレンスによって園全体でその関わり方を検討するとともに、彼への理解を深め、再び保育実践のなかでカンファレンスで得たものを確かめていく、その循環の一部を示したつもりである。ご一読いただいて、ご意見やご感想などお寄せいただければ大変嬉しく思います。また、この報告が何かのお役に立てれば幸いです。

研 究 同 人

園 長	片 岡 康 子
副 園 長	榊 田 正 子
	田 中 三保子
	吉 岡 晶 子
	伊集院 理 子
	上坂元 絵 里
	高 橋 陽 子
	尾 形 節 子
	清 宮 総 子
本学教官	田 代 和 美

お茶の水女子大学附属幼稚園 保育の研究 第4巻

平成11年12月20日発行

発 行 お茶の水女子大学附属幼稚園
幼児教育研究会

〒112-8610 東京都文京区大塚2-1-1
TEL. 03-5978-5881
FAX. 03-5978-5882

印 刷 田畑謄写堂

〒112-0012 東京都文京区大塚3-6-6-201
TEL. 03-3941-1329